



太素抄

上





去来抄叙

芭蕉の翁少くもひまの道平谷ふりて  
<sup>カ</sup>風をさうち曲れるを於一俳諧の生ころを  
傳へてより存其草を抄均して一派  
八隅より中支流湧りて終り川木をふ  
わくも菜摘女と耳小娘と口よあるの時風調  
を以て泥きくるを意を横きりたり

序





穿て風體を折き感説十藝一々今時  
平地平波濤を起し其弊を擧ぐりて  
いせし我を來う魚を多し抄海く  
湧て吞舟の魚をとり次第ありれ也

安永三甲午十月

曉臺



去來抄上

先師評

外人の評有と云とも先師の一言ありは  
も然りけ給ふ記也

蓬萊に寄るや伊勢のたけい 芭蕉

深川より此文もけいさあくの評あり汝いづ園傳る也と云り  
去來曰都又ハ言々の便ともあり伊勢と傳るハ之自然  
式のそやもめよ非代をおもひいさなりゆきと  
道祖神乃ちや獨中をさけいづるをそそ兼傳る也  
先師返りしに汝ら園くまみたるを今日神のかく  
くしあはれりぞねもひ出て慈徳和尚の詞またより初の



一字と吟一清淨のころはまをさき葉ふ對して結ひる世と

かゝるまに松花より朧めて 芭蕉

或人まを苗りの難あらんやと云其角答曰まをい哉まがふ  
ゆゑ哉苗花漢句よにまをの才を嫌ふといふ句切  
迫れいめまをを信るとなり 呂九曰めまをのくはま角  
解あり又是を才之の句なりいかに漢句とをなしたまふや  
去来曰是は即真盛偶めて漢句なるより疑ふ一才之は  
句案に渡るも一才之は先師きて曰  
其角去来、辨皆理屈なり言いたる花より松の朧を面白  
うり一のこなりと

けまはあまを人となしける 芭蕉

先師曰尚白、難に近江ハ丹波も初春ハけ年あもなる  
一といふに汝い、雨信るや去来曰尚白、難あゝま  
湖水朦朧して春ををむむ子便む一、信よ今日の  
うま信るとりま先師曰まをり古人もけ國子春を愛する  
まをなく都よおと、信去来け一言ころま徹寸り年  
近江子居たまういそけ感のあまを人り春丹波に  
おまをいもさよりけ情くふま一風光の人を感動せむる  
まをまなくふとり先師曰汝や去来とも子風信をかま  
まをまをなりとよまこい信てま



いあ戸や鑽のさしてそは月 其角

様義撰の時此句を改りその月を新の月並つゝいひ  
よ一々の衆議をの月よよ新先師曰其角をそは月  
つゞ句もあつたをそは月を定め入集せしれども  
文字つゞりて此紫の戸を改り然るよお板の後大津より  
先師の文を紫の戸を改り此紫の戸なりと改む一と改り凡そ  
大切なりたと出板におもいそ改む一と改り凡そ  
紫の戸此紫の戸を改り捨つなり去来曰は月を紫の戸に  
奇て是れを尋常な氣多なり是を城門を改り  
凡そ改り風情あはれは相違きりなり改り改り改り

そは月つゞりてそは月なり

よまよまいまる時猫の意 越人

先師伊賀よりけ句を去贈て曰公は俗情あるもお一たい  
けは不出といふなりかしく風雅是に至りて本情を  
あつせりといふなり是より先る越人名を改りてく人の  
もつてよまよまいまる一と改りてく人の  
本性を顯すとすなり

こかよまいまる二日の月乃吹ちるる 荷兮

風乃吹ちるるよまいまる一と改り 去来

去来曰二日の月乃吹ちるると働るるよまいまる一と改り



とる、猶ほりとは、先師曰、荷字、句ハ二日の月と  
いふものまで、他せり、名目と除け、ハ、さ、せ、と、と、と、  
汝、句ハ、他、と、も、他、一、り、も、ん、ん、金、神、の、好  
句、な、り、在、地、ま、て、と、う、き、り、ハ、他、と、の、字、い、や、一、と、  
也、一、好、い、ぬ

春風よこす、難の、驚、後、の、旅、 萩子

先師は句と評して曰、伊賀の他、若、あ、い、なる、ま、を、他、と、  
を、な、ら、一、と、な、り、文、牒、曰、伊、賀、の、あ、い、なる、と、先、師、を、  
あ、い、に、教、ま、れ、と、その、あ、い、なる、を、先、師、の、あ、い、なる、と、

清澗や波、工、整、なり、夏、の、月、 芭蕉

先師、難、波、の、病、床、を、平、と、め、一、て、曰、は、は、蘭、女、の、方、を、あ、い、  
同、ま、ま、て、見、る、塵、も、な、一、と、化、す、句、ハ、似、し、清、澗、の、句、  
と、案、一、と、な、り、ら、め、の、草、稿、詳、明、の、方、を、あ、い、一、と、  
破、る、一、と、な、り、然、と、も、ん、や、集、を、あ、い、出、作、は、な、り、  
及、び、名、人、の、句、ハ、公、を、用、ぬ、と、あ、い、る、と、一、

涼、一、さ、け、中、山、よ、り、何、る、名、佛、ハ、 去来

是ハ、吾、光、寺、如、來、の、洛、陽、真、如、堂、ハ、遷、座、を、し、時、の、吟、也、  
と、一、め、の、冠、ハ、ひ、い、や、り、と、也、一、り、先、師、曰、か、る、句、ハ、金、神、  
お、と、な、一、と、信、ま、る、と、の、な、り、又、文、字、あ、い、一、と、  
風、薫、と、改、め、好、し、後、猿、蓑、の、撰、場、を、再、改、て、今、の、



冠をせざるは

西楫やあうー能と有り 郭と 荷等

横巻櫓の時去来曰此句ハ先師の神と横馬亭にけよ  
と回前なり入集るへ〜先師曰明石の時去来といふ  
も〜去来曰明石の知と去来といふ一旬た馬と  
舟と〜一旬た馬と句主のち極なり先師曰句の働小  
おいてき一歩も〜こつ明石と有りえよいれ入るへ  
〜なり終る〜に

君り春 鏡帳も 萌黄子 極りぬ 越人

先師曰此句ハ極つるを去来の極句あり越人ハ極句既極なり

〜ゆハ又極も去来は此句極極ハ萌黄子極もまたたれは  
月影極極なを去て極極の極句とあり〜〜〜〜〜  
君り代りけて歳且と有り極極の極句とあり〜〜〜〜〜

振舞や下座小 去来 去来 去来

け句ハ平おも〜ありては寸五文字言鳥帽子紙衣ハ  
いひ〜〜〜〜〜  
類ハ〜〜〜〜〜  
又文章子心を〜〜〜〜〜  
十分た〜〜〜〜〜

田代屋りの夏つ〜〜〜 万乎



ゆゑは先師の斧正あり——凡兆の句なり様箋撰の  
時凡兆曰け句又もまな——除——去来曰有り是と  
つらひり螢の光圍扱乃系文風姿ありとり凡兆  
ゆるきん先師曰兆あり——捨ハ家捨ハむ幸伊賀の連中  
乃句に是も似るあり又と申け句とふさんとして終  
万乎う句と成り

大と——と行も——と年乃敵うれ 凡兆

ゆゑの文字意すくと申て予う句也信徳曰意さうと  
定——花を誇人の思つる切なり去来曰抱まはお意あり  
古人花を愛して明ると信るも我を——み人と恨山せに

川迷つともいさる月命花さしあねらとら様と定六却る  
年のかさふらといつ花をあさふれなりなむ信徳なり  
ららえはきて先師と語る先師曰ららハ信徳り知とららに  
あしはとなりと後凡兆大年と冠寸先師曰謙は一日  
千年のかさふらといつとも定るも花はと大笑し終り

賽箋も用意教なり花乃表 去来

先師曰花の表とて用をたれ名やなるもや古人も表の  
花とてそと信れ詞を細工してかざる掛きつり云つらら

月雪や舞々ま名をまらとて 越人

去来曰けは伊丹の句に海と水とを志れと憐や神と



と云あり越人句入集いづく傳ふ先師曰月雪といふ  
あつり一句働んてあつても風姿ありたふと構やと  
いひく世歌ととも各あこさくとも神歌の俗体とまで  
趣向と立俗名とくさり傳ふをまを思ふく一又まて  
折もあつじとなり

こゝに傳ふるをまをくさるる蚤の語 其角

去来曰こ角ハ定家他者まで傳ふとつりに蚤の語のつま  
まの語は傳ふかまといひ傳ふ人先師曰志よりかた  
定家の句のつらもあつるをまをくさるる語のつま  
まの語とまをくさるる評詳なる語なり

とつり目をおの山越法花さつり 去来

是ハ後兼二三年前の吟なり先師曰此句いづれ人  
す。一三年と傳ふとつり。後杜因く徒とす。評  
り脚し後ひと歌なるなり。此文字或ハす。世を花乃山と  
いひ或きこはるくともつり。とまをくさるる。まを  
と角の構さといひ。めといひ。み氣文とつり。してす。神に  
舞句もなり。また。とつり。ひまおの山越。山といひ。吟  
り。傳ふとつり。後此句をがり。人もつり。つり。い。あ  
ま。年とつり。とつり。は。い。つ。知。の。人。す。ハ。却。て。後  
あも。と。と。事。と。も。なり。



病后のおまゝに落て詠集なる

海士の象ハ小海老よまゝいゝとぞ

猿蓑撰の時此ら一句入集を――とあり凡北曰病后を  
さるるをねと小海老よまゝいゝとぞハ句のうけにさあ  
――と云ふ秀逸なりとのふ去来曰小海老の句ハめつと  
いと其物をと棄――する時ハ予ハ口もいてん病后ハ格よく  
頰うさるのけりていそり交成棄――つと人と論――終ふ  
あ句ともてと入集とて後先師曰病后を小海老かと  
同――とくに論――とねやといふはゆいなり

岩鼻やうももひどり月乃客 去来

去来曰酒堂ハは句と月の様とす――と中傳はと予ハ客の字措  
る人の中先師曰猿とを何れそ汝此句といつにおもひて  
他せぬや去来曰明月ハ山形と吟歩――傳ふ小岩頭亦  
一人の騷客と見付し傳ふ中先師曰是ももひどり月乃  
客と己と名ふかゝるんそといくはく此風流をいふ  
自稱の句となす――は句ハ我も珍重――て笈の小文に  
書入る傳ふ人予ハ趣向を一等とて傳りたり先師の  
意をもて見付し少――狂者の感もあつたや笈の小文集ハ  
先師自撰の集なり名を因ていふ書を見付し草稿半  
みて遷化する――くくる昔時中けるを予ハ羨句羨句



入集か―終つるやと歌ふ先師曰家門人笈の小文を入句  
三句持て尚も能希とんぬる分のこと云い一―也

つづまの歌茶乃下能さむさか 夫州

先師雅波の病床より人に夜伽の句をすめて曰今日  
より我々死後の句なり一字の相談を加ふ毎のすも也  
戸西くの吟とも多く傳りたる此句能く夫州を著しと  
のこまよかる時きう歌情をそ動傳るの興を後―  
景とさくると豈いと備あらんやとけ時を思知傳る

下系や雪つむさか能扱乃雨 凡兆

此句初に冠なく先師をさめいらくと云傳りて

け冠の極め終ふ凡兆あと答ていさる落着先師曰凡兆  
子かゝに此冠をさめ―若あま尚も能あると我二たい  
能讀をいふ―いとなり 去来曰けみ文字のよきことは  
誰くも志り傳れとは是外にあま―ときいそ知傳らん  
けり代門の人を傳るを獲い―いけ月も冠をさめ―  
そよりとたか尚も扱を又こけにをさく―りあんと  
おもひ傳る也

猪乃寐よりさかや月能 自 去来

此句を歌ふ時先師をさく吟して兎角をのこる  
予思ひ得る先師といへも歸る傳つ扱無門の意を



知れどもんやと云くくのうと申す傳は先師曰くも  
一ろふ不き言人もよく知れどもを嘲めして跡をより  
山に入る者おとひ送る歌の上風と云ふありける和歌  
優美のくはまてかたてけり他一も我佛詣自由の  
くへまを尋常の氣文と他せんを更にも扱なうと一  
一句おもくもあはれを皆業一ぬれと兎角の詮あり  
あへ一となり其後おもふはけ句ハ郭公なまつるこ  
いふる後徳大寺の歌の同業とていよくも柄なきこと  
知れり

薩州葉のーー

谷口よんはまを  
尾花の人の句

け句を薩州の葉の谷風は一すも幸すも裏吹く一と句と云句を  
う一平先師のけ句と結み先師曰く發句ハ郭公のこくも  
すていひはくもあはれなり支考かすもたて  
大に盛譽一とてあて發句とて物に氣傳るとてけ  
も然るより有り平も時も筆末もすも一とてたや此  
あつてもなくも忘傳るともいふも意あり

下外まつらけとやいと

先師語よまを浩然此の其角の集小け句ありいに思  
う入集一とて去來曰いとさくの十分の歌容  
あつたにせむも傳すや先師曰いひ課と何の歌



予らよわいのう肝を銘きうらみありんかめそ後句をなす  
しんじきぬきし事とぞ知れり

在哉とる川中より流るり 續月 去来

魯町は別所時の句也先師曰け句悪しとらふま  
わしん功志まそたけいひまきううしとるなり去来曰  
いふ處もさしてふた事と句よてあやほのこもあひ  
まうれともいする十か二解せぬ予々公中小つ抱持れとも  
句よめあしれすと見ゆいといはれ是ハ意到句不到也

泥亀や苗代水乃 畦し川に 史邦

猿蓑の撰に予誤し哇つらひと書入るり先師曰哇つり

と傳ひと歌容風流音おなり疎小畦つりしと哇つたり  
ともよめり軒窓の氣色とあやまるとり筆跡最のこに  
おしあ句とまよりおむろそつあは故なりとそまけん  
何しりきり

あしとるに疎れと涼しと夕暮 宗次

さるるるお撰の時と一句の入集を彩ひて後句吟し傳は  
るつと句なし一夕先師の傍に侍りたるふいさと伝  
ふまはつらふも所しなんとおほせられしはとれいしと  
あしとるに居れと涼しと傳はるとり夕暮先師曰  
是しを後句なれとそ今の句よ侍りて入集せしはとる



夏相の美なりや親乃親 去来

こゝのハ面影のおほろみゆうー鬼恋といふ句なり  
此時添書小糸時を神いすす如ーとやむ夏相の美  
なりーく是傳るすーとや増る先師返事子夏恋をの意味  
なりーけかよてハ言ひる處中無くハ註小夏相は夏  
あつーやと傳るを何とて句小なきるやとねとろり  
ー好ひたり

夕す夏氣おろーて帰たり 去来

予々初學の時漢句は中々親けるに先師曰漢句ハ  
句はよく俳意たーくに他すーとまり試み此句は

賦して親くはて又是もも大笑ー好ひたり

はくあふるともたけや夏田 游力

凡此日は夏田を麻田ともぬまん去来曰夏田に  
なりてもゆもなまなりてもくーと論す先師曰  
又之はぬはぬ論くー後ー無用なりと割ー  
好ひたりえる人恋せよ

いそーや沖のーの美帆片帆 去来

去来曰猿蓑を新風の始なり時雨を此集の美目を傳  
ふ此句はそよひ傳るた菊明や片帆をけて一時西  
とくそいそーやよりも句はなりよく人の福とる



まぐさうん美帆もそ然しらゝもさうん先師曰沖の  
時雨とりも又一ふりまきりさん句いさゝらにわたり  
傳へしなり

兄弟能教えあひすやほとむい 去来

去来曰此句ハ五月廿八日當我兄弟の互に教え合ふる日子親なるも  
くらむむらゝ一廿一光原氏の村の朝陽をたすむらひ一と  
紫式部うたまいやりゝる趣さうりて他は先師曰るふとのゝと  
すなうゝ一句いさゝらおかせぬさう角々評も同前なりと  
深川より評一終ふ許六日此句ハ公勝りて廻たゝん  
去来曰ん然りて廻さすといへんハさうりありたゝん

おほせぬとも評す一夫州曰今然他まはさか  
うけ魚りぬねと是あま合兵の目なる一とたす笑り

うけと自らにむらゝ横雲

まきゝんおちより花の咲らぬま 去来

先師をすけし趣りら花見の客を志まひらりと附傳るもの  
先師の教つきをうゝさくはと又あをえさう此句を附  
なむす先師曰いふに思ふて附傳し傳るや平日朝雲の  
のちに楳嶽よりゝとらんと初に附傳れと能るるまは朝雲乃  
まはいなまけいふをうらなりこれのうゝてハ詮なるゝと  
附傳し傳るといふ先師曰やちり初の句あるハ二十楳嶽なるゝ



於後なるなどあるし——とて今姑み文をよはたりたり

梅よりすめお枝乃百なり 去来

去来歳旦の暇なり先師深川まで岡て曰は梅ハ二月の  
氣交なり去来いふにおもひ誤く歳旦の暇も用お  
くもいふむ

船より月乃西園乃馬 彦根の  
句

許六ろろこれ矣とてく時此句よ長とくけり  
先師曰いふもくも長ら——ま句もま——の体もくもま  
の体なり長あま——のまてよ京の時け句何ゆゑふ  
平帳もゆるや先師曰船の中こそ馬の顔よりいふ

了—西園の馬ともていふく——くもおなりとぬむ

弓法乃角さ—出は月乃雲 去来

去来同曰此句もも長なるも無むや先師曰も長あま  
雲も角も弓法月もいともハ—句もあま

丁稚う 擔ふ 水さか—り 元祀

初き盡なり元祀曰尿盡のくもや—ま先師曰  
嬌く—はさく—不韻とらやも二句は過—く—句  
な—く—も—の—む元祀水よ改む

あひ ほんともけく—池の蓮乃実

咲花よかまおは極のかく—ま— 芭蕉



此句出る時去来曰おれお句をの守一くはとて好刻  
業一くはと皆くなく先師は附句と云ふ一くはと  
新しき附句一れ

くろみそ高き櫻本乃森

咲花は小き門を出入川 芭蕉

此句出る時去来曰お句全折櫻本の森の森の森  
いしそおををを矢り花と附するのむつ一  
う新しき一と先師の附句ををを新しき一と見せ給ぬ

後乃森すなは川る日の新

なくくも小き草鞋のとめく 去来

先師曰よき上福の旅なる一くはと平られをききて好  
此句と附句りく好春日上福の旅と云く言下句  
まより蕉門の徒の修練格別也と感す

二つはつり 雲乃 秋風 正秀

中連子中よりおく月影に 去来

正秀亭の才三なりと云ふ「和格子新もあつて月影に  
と付ゆるを先師くくき斧正し給たりと云ふもに  
曲翠亭は宿す先師曰くお初て正秀亭は余に  
縁客なるを後句は我なる一と云て是悟すつて  
も上後句と云く好悪を云くは迷く出すつて事也



一板のちとぎらくくあふ汝う漢句は時どくつさハ今昔  
乃余むなしくむ修り不真のいかりなほ我々漢句を  
出す——とそおき先師の漢句なり——正未忽  
脇と賦に二つは内と名けし雲の氣をなほを  
かくけしやうふ骨三階よりあ句のけしきと標し  
未練のそりなりとおす——いかりけしき去来曰く時に  
同類は多しひたたる山名をそり一句けりうは我  
た月の子又そりけしきいんちけしきなつて伝を  
いさしけしき先師曰く句をいさしけしきけしき  
あふんは漢の漢系のと一度すうんを思ふ——と

ふあな——に意を——く 去来

沙芽生におも——ろけつく伏んぬ 芭蕉

先師系より野坡方の文は此句を去出しはるこの記者  
いすは其味をえんれんともと随分睡をとりきり  
無の——はと也

赤人の名きつうけりりり 史邦

先師曰中の七文字うくおろけり漢句の長き——と  
きくきり

駒亭此本著やん之日の月 去来

そやいんち月の約といふそりりり本著やん之日



三日の月とふつと先師曰此句を筆風と人今世にふ句  
なりとあさなり終つと

上終



